

日本人と欧州人の建築・都市空間に関する考え方の違い

NYILAS AGNES

はじめに

外国人から見ると、日本建築のあり方、日本人の建築・都市空間に関する考え方の中で理解し難い部分がたくさんある。多く残されている古い建物を中心に構成されかつ人間的なスケールを保っている欧州の街から来ると、日本の街でまず気になるのは、古いものと新しいものの理解ができない混じり具合、そして都市インフラの、人間が把握できる範囲を超えるスケールである。教会や大聖堂、広場などのランドマークも殆どなく、道路には名前がないケースが多く、住所の番号も建物の並び順に沿ってあるとは限らず、はじめはとてもしオリエンテーションしづらい。そして屋内空間に関しても、家の中の空間をきっちり仕切らないことと、隣の家との狭い間隔にも関わらず空間が解放されていることから、家の中のプライバシーがないと云える日本の現実、家の中のプライバシーがしっかりと確保されている欧州の家に慣れていないと受け入れ難い。しかし日本人も、きっと、欧州の建築・都市空間に関して違和感・不快感を持っているだろう。そこで、空間の創造と評価の過程に関してまとめた上で、欧州人と日本人の建築・都市空間に関する考え方の差、そしてその背景にあるものについて考えてみたいと思う。

1. 空間の創造と評価

1.1 建築はそもそも空間なのか、構造なのか？

建築を考えると、一般的には「空間」と「構造」との二つの概念が真っ先に思い浮かぶかと思うが、まずはその関係性を明らかにする必要があると考える。建物の使い方から考えると、建築空間は生活の場であったり、仕事の場であったり、遊びの場であったりすることから、人間が使うのは空間であると云える。一方、室内空間は建物の床、壁、天井などの構造体で囲まれた実際何もないところであるため、物理的に創るのは構造体である。従って、空間は、どちらかというとな抽象的な存在として捉えることが多いが、その囲む構造体によりサイズ、形、配置などの物理的な特性をも所有する物理的な実態として考えることもできる。即ち、建築を創造することは、建物の想像された使い方を基に空間をイメージし、そのイメージに沿って具体的な形態を持っている構造体を創るということである。

しかし、同じ空間イメージでも、それに対応する建築形態は理論上では無限に考えられる。建築家が、無限のオプションからなぜその一つの建築形態を選択したかは、建築創造の過程で最も謎に包まれたところであるとされている。本来ならば、利用者にも最も高く評価される可能性がある形態を選択すべきであるが、建築家は勝手に自分の趣味や好みを活かすことも少なくない上、利用者による評価基準にも場所、そして時代による差が生じる。但し、建築家も利用者も、建築・都市空間を主に視覚的に捉えることには変わりがないことから、建築・都市空間の、視覚観察による評価の過程を理解するのは、建築創造に

は不可欠であると考える。

1.2 視覚による空間の評価

視覚観察による、建築空間の評価は、「知覚・認知・評価」という三段階のプロセスとして理解すべきだと考える（図1）。第一段階では、観察者は建築空間から受けた視覚刺激（光）が眼といった感覚器官により知覚情報に変換される。第二段階では、脳に送られた知覚情報は人間の記憶というフィルターを通り、何らかのイメージとして認識され頭脳にファイル化される。そして第三段階では、観察者の生理・心理的状况によりそのイメージが判断される。即ち、空間が美しいとか、落ち着くとか、癒されるとか、などの判断は、人間の生理・心理的快適感を表す表現であると云える。

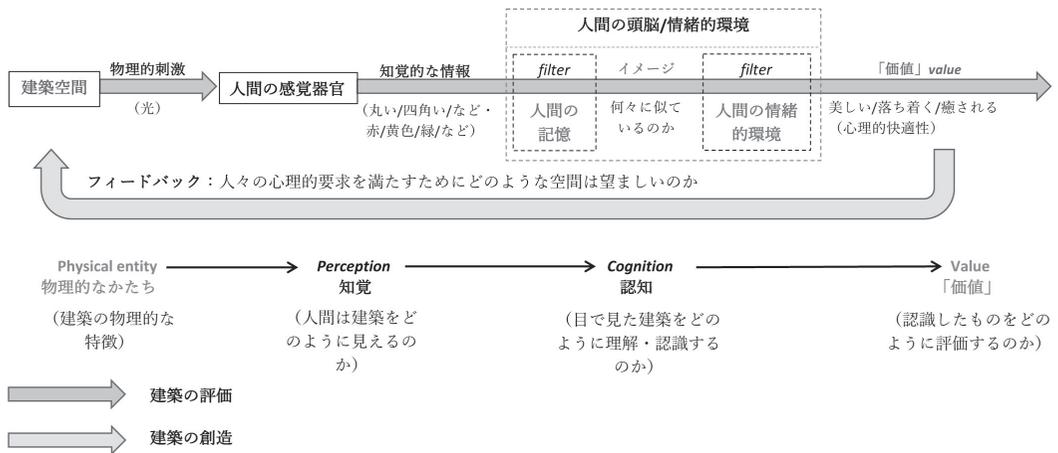


図1) 視覚観察による建築の評価

人間は頭脳に蓄積した様々なイメージファイルを人と交換してコミュニケーションを行う。人の人としての中枢にイメージがあり、お互いのイメージを確認することによって共感が生まれる。似ているイメージを持っている人同士では共感が生まれやすいことから、たくさんの似ているイメージを持っている可能性の高い民族同士内で共感が特に生まれやすいと考えられる。また、経験したこと、習ったこと、常識を共用するため、各民族にはその民族に特有な心理的傾向があり、何が快適なのかの判断も民族によって微妙に異なる。例えば、日本人は、日本文化である夏の心霊怪談や風鈴の音色などで涼を感じる特有の生理・心理的感覚を持っているとされていることもこの説を裏付ける。「文化」というのはある地域に固有な気候風土に基づいて築かれるものであるため、その原因は気候風土にあると考えられる。即ち、日本の気候には夏が暑く湿気が多いという特徴があり、この厳しい条件のもとにできるだけ快適に暮らすために心理的工夫が必要である。従って、気候風土の上に成り立っている文化は、人間の心理的状况に影響する大きな要因であると云えつつ、このことから、心理的状况に基づく、建築・都市空間の良さに関する判断、そしてその結果として建築・都市空間のあり方にも文化による差が生じると考えられる。

2. 欧州と日本の建築・都市空間のあり方

2.1 構造 vs. 空間

近代化や戦争に伴うナショナルアイデンティティの危機を背景に、日本文化の特徴は戦中期の「近代の超克」論を先頭にしばしば議論されるようになった。戦後にはあらゆる学問分野まで議論が広がり、建築界では「伝統論争」という名目で、建築ジャーナリズムを賑わせた論争が行われた。論争の一人の中心人物であった浜口隆一氏は『日本国民建築様式の問題』¹⁾で、ヨーロッパ建築の「構築的」方向に対して日本建築は「空間的」なるものを追求すると論じた。濱口に続いて、戦後日本建築界をリードしていた丹下健三氏は『現代建築の創造と日本建築の伝統』²⁾でゴシック建築を日本建築と比較し、前者は技術により構築されたことが強調されるため自然に対峙する、自然から奪い取ったものとして捉えるが、後者は自然に提供された空間として考えるべきだと主張した。丹下の主張を、丸山眞男氏がほぼ30年後に発表した『日本政治思想史』³⁾で使った「作為」と「自然」という二つのキーワードを基に表現してみると、欧州建築は構造を中心に、建てる作為を主張するのに対して、日本建築は空間を中心に、自然のプロセスを主張すると云える⁴⁾。欧州建築は実態的、日本建築は観念的であるという言い返しもできるだろう。そしてその理由を追求するため、気候風土の話に戻る。

欧州の気候は、冬は寒くて夏は暑い湿度が低く、地震は殆どないことから、熱伝達率の低い（断熱性が高い）粘土ブロック（図2）、煉瓦、石などの組積造（図3）が一般的である。組積造は、構造上、開口部を大きく取れないため、外壁の流れが割り込まず一体感を保つので、建物は空間より構造として捉えやすく、構造の形態がより建物の印象に影響する。また、開口部が大きく取れないため、建物は外に開き難く、内部空間と外部空間はお互い完全に独立している。更に、素材の特徴から、建物の寿命が長いこと、「永久的」というイメージを持つ。家というコンセプトに関する考え方も同様に、欧州人は家を生活の根拠となる不変的なものとして考えるのが一般的である。一方、日本は夏が暑く湿度が多いこと、地震が発生しやすいこと、そして木材が豊富にとれることから、風が取り入れやすい木造（図4）の架構式構造（図3）が一般的である。架構式構造は基本的には柱と梁で構成されており、開口部が極端に言うと全面開けられるため、構造体の存在感があまりなく、建物を空間として捉えがちにある。また、大きな開口部を設けられることにより建物の開放性、そして内部空



図2) 粘土ブロックの積み方
(引用：<http://amiotthonunk.hu/epites-felujitas/epitesi-tanacsok/6227-epitsunk-valyoghazat!>)

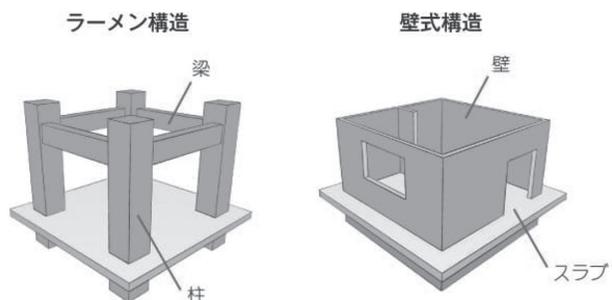


図3) 架構式構造（ラーメン構造）と組積造（壁式構造）
(引用：<https://kawlu.com/journal/2017/05/23/35776/>)

間を追求するため、気候風土の話に戻る。

間と外部空間の連続性が確保される。しかし、木造は寿命が短く、「一時的」な印象があり、日本人の多くが家のことを「仮寓」として考えることも、この理由に基づくであろう。そして日本の家は、他の意味でも「一時的」であると言える。即ち、柔軟性を持ち、木造建築であるからこそできる部材寸法の規格化により互換を可能とする。

このように、異なったそれぞれの気候風土に基づく構造・構法やそれに基づく建物のあり方・存在感が当たり前だという感覚を持って暮らしている欧州人と日本人は、空間に関する考え方が違うのも当たり前であろう。欧米人にとって、建物を構造のかたちから考え、永久的なものとして捉えるのが一般的であり、かつ、家に入ると外の世界が切り捨てられるのが当然の感覚であると云える。日本人にとっては、逆に、建物に空間のイメージが強く、構造自体は一時的なものとして考えるのが一般的であり、かつ、家から外の自然や隣の建物の存在が分かる感覚が当然であると云える。これら理解を基に、次にはスケールを広げて都市空間に関する欧州人と日本人の考え方の違いについて考察する。



図4) 木造軸組
(引用：<http://www.koukenhome.jp/house-manual/2098.php>)

2.2 広場 vs. 街路

欧州では、古代ギリシャのアゴラ（市民広場）を原型として広場を中心にしてつくられた街が多い（図5）。人々は毎日のように広場に集まり、話し合ったり哲学を論じたりをしたため、広場は「市民が一つのコミュニティを構成するための中心の核になるような、つまりコアであった」⁹⁾とされている。これに対して日本の街には広場がなく、お祭りなどのイベントの際に市民は街路にて集まり、神輿を担いだり山車を



図5) 古代ギリシャのアゴラ
(引用：<https://galahotels.files.wordpress.com/2012/01/the-agora-in-ancient-athens.jpg>)

引いたりしていた（図6）。この基本的な違いを基に、欧州人と日本人の都市空間に関する考え方は根本的に異なっている。街の中心となった広場は、本来、市民が集まる場所ではあるが特にムーブメントを主張するものではないため、欧州人は街を静的現象として捉える傾向にある。一方、日本建築では、街路のコンセプトを中心に、動きによって空間を展開してゆく方法が昔から使われているため、日本人は都市を動的現象として考えるとさ

れている。戦後日本建築で行われた「伝統論争」で『新建築』の編集長として主役を務めていた川添登氏によると、これには象徴的な意味も含まれ、都市の動的現象としてのイメージは「生命の躍動するプロセスを象徴している」⁶⁾。なぜかという、日本人は「自然の流れに身を委ねる意識」⁷⁾を持っているからである。日本の都市空間の「一時的」な印象もこの理由に基づくと云える。これに対して、静的に捉える広場を中心とする欧州都市の「永久的」な印象は、欧州人の、自然と共生するより自然を支配する考え方を反映すると考えられる。

また、広場というパブリックスペースがたくさん確保される欧州の都市が公共性を保つのにに対して、日本の都市はこのようなスペースを含まず、「都市の形成のされ方のなかに、非公共性のようなもの、反社会性のようなものが濃厚にあ[る]」⁸⁾。逆にいうと、日本の都市空間には「私性」が出て

きていると云える。しかし、家に入ると、この関係性は逆になる。欧州の家にはホールという半パブリックな空間があり、それを超えて自分の個室に入ったら、そこは個人のプライバシーは完全に守られる。日本の考えはこれと逆に、玄関を入れてから個人の完全なプライバシーが取らず、家というのは家族という小さな「社会」がシェアするパブリックスペースであると云える。つまり、欧州の個人単位で考える「私性」に対して日本の「私性」は家族単位で考えるべきである。

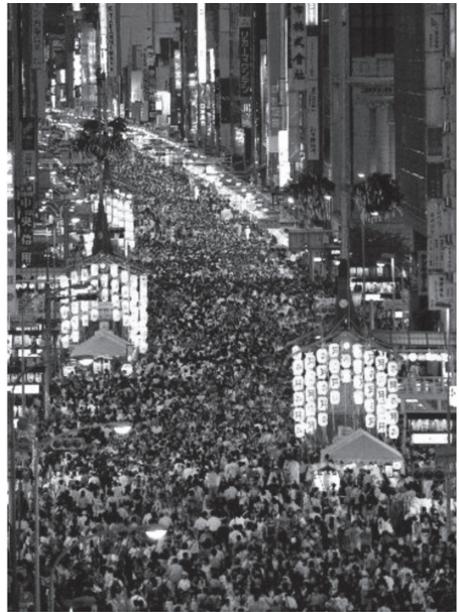


図6) 街路に行われる日本のお祭り
(引用：<https://www.pinterest.jp/pin/627267054322222229/>)

2.3 「外的秩序」vs. 「内的秩序」

都市空間についてのもう一つの大きな違いは、欧州人と日本人の秩序の感覚に関する差からみると、芦原義信氏⁹⁾は語った。芦原氏は、パリと奈良の空中写真を比較し、パリに見られる都市全体の秩序は奈良には全く見られないにもかかわらず、一軒あたりの建築の内部を見ると、驚くべき秩序がそこにあると主張した。即ち、欧州の都市は「外的秩序」を保つことに対して日本の都市には「内的秩序」といったものが存在する。そしてこの差は、社会・家族制度の違いからくと論じた。欧州の都市における「外的秩序」は中世ヨーロッパの様々な強大の権力機構によってのみでできたものであり、日本建築の室内や庭園における「内的秩序」は日本の昔の家族制度に成り立つのだと。従って、欧州人は都市デザインに関して全体像を持ち、外側からアプローチする方法をとりがちであるに対して、日本人には部分的に、内側から都市デザインをアプローチする方法が向いている。

まとめ

人間の空間認知の過程から見ると、視覚観察による空間の評価に影響する大きなファクターが二つあると云える。一つは人間の記憶、もう一つはその心理的状况にある。記憶は、頭脳に蓄積されたイメージファイルから構成され、新たな視覚刺激による視覚情報は脳に送られるときに、それをイメージ化するプロセスに欠かせないものである。従って、似ている環境下で育てられた人同士は持っているイメージストックは似ている可能性が高いと考えられる。また、人間の心理的状况に「文化」という要因やそれに伴う「常識」が大きく影響すると云える。しかし、各文化はその地域に固有な気候風土の上に成り立っているため、ある民族の心理的傾向は気候風土からなると考える。これらから、建築・都市空間の視覚観察による評価、そしてそれに基づく建築・都市空間のあり方には民族による差が生じるのは当然であると云える。欧州の建築は構築的で建てる作為を主張し、実態的なものとして考えられる。建築空間は永久性を保ち、非開放的である。欧州の都市は広場を中心とする静的なものとして捉え、公共性を持つのに対して、家は個人単位での私性を確保する。都市計画は全体像から考えられ、都市空間には「外的秩序」というのが感じられる。一方、日本建築は空間的で自然のプロセスを主張し、観念的なものとして考えられる。建築空間には一時的な雰囲気があり、

開放的である。日本の都市は街路の動きを中心に動的現象として捉える。都市は非公共的であり、これに対して家は公共的というか家族単位での私性が感じられる。日本は都市計画が部分から考えられ、建築の室内や庭園における「内的秩序」は家族制度の上に成り立っている（表1）。

表1) 欧州と日本の建築・都市空間に関する考え方

欧州の建築・都市空間の特徴	日本の建築・都市空間の特徴
構築を強調する	空間を強調する
作為を主張する	天然のプロセスを主張する
実態的	観念的
永久性を保つ	一時的
非開放的	開放的
広場を中心とする	街路から成り立つ
公共性を保つ	非公共的
個人単位での私性	家族単位での私性
全体から詳細へ	詳細から全体へ
「外的秩序」	「内的秩序」

元々はこれほどの差があるにもかかわらず、この数十年はグローバル化が進み、各地域・民族の建築・都市空間のあり方の差を無理やり削ろうとする考え方が広がる傾向にある。しかし、気候が根本的に変わらない限り、その上に成り立つ（建築文化も含む）文化は、表面的には変わっても、その本質は変わりようがない。従って、そろそろ自分の文化を見直してローカルな価値観を再評価すべきであろう。

参考文献

- 1) 浜口隆一、「日本国民建築様式の問題」、『新建築』、1944年、1、4、7/8、10月号
- 2) 丹下健三、「現代建築の創造と日本建築の伝統」、『新建築』、1956年、6月号、pp.29-37.
- 3) 丸山眞男、『日本政治思想史研究』、東京大学出版会、1986年
- 4) Arata Isozaki, Japan-ness in architecture, MIT Press, 2006, pp.47-53.
- 5) 丹下健三、『人間と建築-デザインおぼえがき』、彰国社、2011年、p.165.
- 6) 川添登、『日本文化と建築』、彰国社、1965年、p.383.
- 7) Ibid、p.364.
- 8) 丹下健三、op.cit.、p.165.
- 9) 芦原義信、『街並みの美学』、岩波現代文庫、2001年